

江戸時代から続く県内唯一の絵馬

本納絵馬

No.386

絵馬研究の第一人者であった岩井宏實は、その著書で、絵馬を市井の人々の「神仏に対する敬虔な心情、神と人との媒介としての聖なるもの、人々の祈りの記念物」としての性格を持ち、絵馬に描かれた図柄の多様さは「日本人の心の万華鏡」のようだと言っている。

現代でも普通に神社寺院で絵馬を目にするが、それら絵馬の一つ一つに、さまざまな人々の、さまざまな願いがあることを思えば、まさに心の万華鏡がそこに広がっていることを実感する。

言うまでもなく、本市には千葉県が誇る本納絵馬がある。本納絵馬は江戸末に初代矢部久右衛門が現在の地本納に創業し、以後、2代目矢部翠堂（1848-1912）、3代目矢部きせ（1873-1916）、4代目矢部華徑（1897-1981）、5代目矢部宏（1935-）と矢部家代々にわたって受け継がれてきた。

茂原市立美術館では、平成24年に「本納絵馬五代の系譜と矢部宏展」を開催し、現在確認される最

古の本納絵馬である初代久右衛門作の「拝み図」1865年（慶応元）から現在までを体系的に紹介した。

本納絵馬は1985年（昭和60）に千葉県伝統的工芸品として指定され、その製作者は5代目矢部宏氏である。千葉県伝統的工芸品制度とは「千葉県の風土と歴史の中で生まれ、伝統的な技術・技法が受け継がれてきた優れた工芸品を千葉県伝統的工芸品として指定」する制度で、昭和59年にはじまる。これまでに201品目が指定されてきたが、市内の「上総袖風」（昭和59年指定）のように廃業したものも多く、毎年、新規指定があるものの、現在は85品目に留まる。貴重な文化資産を守り、育むことの難しさを実感する。



▲矢部翠堂「牛若丸と弁慶図」1873年（明治6年）100cm×97cm
【矢部華徑による補修加筆1969年（昭和44）】

本納絵馬の特徴は、矢部家で

代々製作されてきた「鶏、狐、馬、鳩、拝み」の相伝5種類の絵柄と、自由で絵画性の高い絵柄の両方を持つのにあると言える。

優れた南画家でもあった4代目の華徑（謙太郎）は、本納文化財顕彰会会長を務めるなど各方面で活躍した。1974年（昭和49）に茂原市無形文化財に指定され、1981年（昭和56）に没した。現在の本納絵馬のスタイルの確立者である。

本納絵馬の地元集落には歴代の本納絵馬を一度に鑑賞できる小さな社があり、大絵馬7点と各時代の拝み図小絵馬19点がとても良い状態で保存されている。社の内部も境内も美しく整備されている。氏子の方々が力を合わせ、心を込めて守り続けている。岩井の言う「絵馬に寄せる日本人の特別な心情」がそうさせるのだろうか。

地域の名を冠した絵馬があることは、この地域が文化的に成熟したことの証左であり、誇りである。いつまでも大切にしたい宝物だ。

茂原市文化財審議会委員 齊藤 望

問合せ

生涯学習課（9階）

TEL (20) 15559 FAX (20) 16007

文芸コーナー

今がいい時

井上 昭子

色褪せたハンチング帽子を被り
お気に入りの上下揃った外出着に着替えて、
玄関の椅子に脚を組み、待っている
「まだ来ない！」

「今日は違いますよ」

デイの日を間違えている夫に言った
予定表も見間違える様になったのかと
私の気持ちは、少し沈む
ヨロヨロとやっと立ち上がり、またリビ
ングに戻る

何事もなかったかのように、テレビを見、
新聞を読み、ごろ寝をし、
食事になると、立ち上がり、トイレにも行
く。そうして一日が終る。

あの昭和、平成の日に、家族を支え、守り、
働いて来た夫は、
令和の今、その役割から遠ざかり、静かに
来るべき時を待っている

私もそうだからと見守る私がいる
今こそ平和な時ではないかとこれがいい
時だと呟く

◎選評 斎藤正敏

お気に入りの外出着に着替えてデイサービスの車を待つ夫。家族を支え守り働いてきた夫。私たちは日々の暮しの微妙な変化を生きている。今こそ平和の時 これがいい時と呟く作者がいる。

●偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。

●投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。

※詩の原稿送付先（直接選者）へ 〒297-0032 茂原市東茂原7-55 斎藤正敏宛。

詩は随時募集しており、どなたでも応募可能です。たくさんのご応募お待ちしております。

「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内でお願いします。

